

## I 図画工作科における自律した学習者の姿

- 形や色などに関わる造形的な気付きを自ら獲得し、表現につなげる姿
- 表したいことに対して、物語を紡ぐように想像を広げていく姿
- 造形的な視点に基づき、自分なりの意図をもって表現を発展させていく姿

## II 授業デザインの取組

- 自分にとって必要なタイミングで造形的な気付きを獲得できる場づくりをする。
- 想像を広げていく助けとなるように対話する。
- 造形的視点に基づいて、表現の意図を尋ねたり、表現や鑑賞の活動を価値付けたりする。

## III 1年次に生成した仮説

### 1 成果

表現方法を試す過程で造形的な気付きを獲得し、その後の表現を発展させた姿



多様な表現方法を試すことに没頭する時間を設定し、その方法が生み出す形や色の効果を実感できるようにした。

子どもがもつ表現の選択肢を増やしたいという思いから、クレヨンや水彩絵の具を使った表現方法を試す活動を設定した。その中にあった、型紙のふちを塗り、そこからはみ出すように外側にこする、ステンシルという方法。5年「おいでよ ぼくの島・わたしの島」の学習が始まってから、しばらくは別の方法で表現していたある子どもは、様々に試行錯誤する中で、このステンシルを始めた。やっていくうちに、手慣れた様子を見せ、それに伴って、ぼかした色の鮮やかさも増していった。自分でもこの表現方法に手応えを感じたのか、複数の色を組み合わせたり、型紙を魚の形にしたり、別に作った魚をはみ出して貼り付けたりと、表現を発展させていく姿が見られた。またある子どもは、本題材で水彩絵の具を用い、水の透き通った感じを表現するに当たり、水の量によって見え方が変わること、実感しながら気付いていく姿が見られた。その後の題材でも、空や木々などに、この時の表現を活用していた。体験した表現方法に自分なりの手応えを感じることができれば、その後も意欲的に表現を発展させていくことができるように思える。まずは多様な表現方法を試すことに没頭する時間を設定し、次も使いたいと思えるような手応えを味わわせたい。

自分が想像したことや表現の仕方に自信をもつ姿



子どもが表そうとしていることに対する共感的な言葉掛けを継続し、造形的な価値付けを行った。

黒一色を使った線描をある程度進めると、手を止めて自分の絵をじっと見つめる子どもがいた。表したいことを説明的に表現することは既に達成され、次に何をしたらよいか分からずにいたと想像されるが、途中、同じグループの友達と色について会話をきっかけに、他の色を使い始めた。そこで、色の組合せの意図を尋ねて共感したり、濃淡のグラデーションの綺麗さを価値付けたりしたところ、さらに他の色と組み合わせたり、グラデーションの範囲を広げていったりする姿が見られた。このように造形的に価値付けることで、自分の色遣いに自信をもつことができたのではないかと考えられる。4年「Future FUZOKU School!」の学習でも、子どもが表そうとしていることに驚いたり、称賛したりする共感的な言葉掛けを多用することにより、想像を広げていく姿につながった。教師は「子どもと共に新たなものを生み出す仲間」という姿勢を大切に、対話をしていきたい。

### 2 課題

造形的な気付きを獲得しながら身に付けた表現方法を活用したり、さらに表現を発展させていったりする姿を見ることができた。だが、こうした姿は、その題材に至るまでに出会った表現方法に対して、手応えを感じられた子どもに限られていた。自ら活用したいと思えるように、新たな表現方法との出会わせ方や既習の表現方法の想起のさせ方を工夫したい。また、造形的な価値付けを行うためには、造形的なよさを見取る教師の力量を高める必要がある。題材ごとに、ねらう造形的な価値を明確にした、教材研究を行っていきたい。

## 5年図画工作 表現の広がりを目指して

指導者：三浦 菜子

### 研究の実践

#### 1 題材「おいでよ ぼくの島・わたしの島」

#### 2 授業の実際

##### (1) 説明的な表現を越えて

「自分の島に友達を招待しよう。どんな島なら楽しいかな。また来たくなるかな。」あえて狭めた枠組みが、子どもの想像を助けることを期待しての呼び掛けだった。

この呼び掛けに、お菓子屋や八百屋など、店がいくつも並ぶ島を表すことで応えようとしたA児。店と店をつなぐ線路を始め、島の内部を黒色のみの線描で表現していた。ある程度描き進めると、手を止めて自分の絵をじっくりと見つめる時間があった。この時のA児にとっての黒色の線描は、島の内部を説明するための記号的なものにすぎなかったのだろう。線描を終えることは、すなわち表現も終わりを意味し、次に何をしたらよいか分からずにと想像される。一見没頭して表現しているかに見えた姿は、作業に集中していたにすぎなかったのかもしれない。だが途中、同じグループの友達と色について何気なく会話をしたことをきっかけに、他の色を使い始めた。黒色の線画と僅かな色彩を残して迎えた次時では、他の色と組み合わせたり、色の濃淡を生み出したりしていた。色の組合せの意図をA児に尋ねて共感したり、水色のグラデーションの綺麗さを価値付けたりしたところ、作品は最終的に写真のように変容した。自分の色遣いに自信をもち、表現する楽しさを味わっていたのだとしたら、授業者として嬉しく思う。

本校に赴任してから、子どもの表現を停滞させないためには、まずは表したいことをはっきりともたせることだと考え、実践を行ってきた。そして、表したいことをもつことができても表現が発展しないのは、子どもが説明的な表現を乗り越えるための支援が足りなかったからだ気付いた。A児との関わりで示唆を得た、造形的な価値付けを他題材でも実践していきたい。

##### (2) 表現の手応えが意欲に

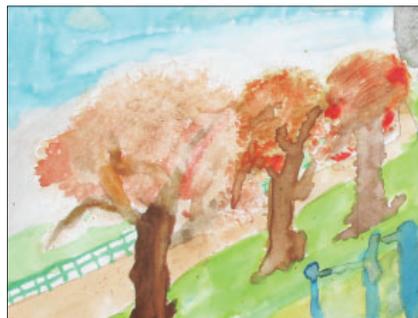
子どもがもつ表現の選択肢を増やしたいという思いから、本題材の前に行ったクレヨンの造形遊び。型紙のふちを塗り、そこからはみ出すように外側にこする、ステンシルという方法を取り上げた。子どもたちはそれまで、こうした表現をしたことがないようだった。B児は、本題材が始まってから、しばらくは絵の具を使ってスタンプを重ねる表現をしていたが、様々に試行錯誤する中で、次にクレヨンによるステンシルを始めた。やっけていくうちに、B児の手付きもどんどん手慣れたものとなっていく。それに伴って、ぼかした色の鮮やかさも増していくのが分かった。自分でもこの表現方法に手応えを感じたのか、複数の色を組み合わせたり、型紙を魚の形にしたり、別に作った魚をはみ出して貼り付けたりと、表現を発展させていく姿が見られた。その後の題材でもこれらの方法を度々活用している。

C児は、本題材で水彩絵の具を用い、水の透き通った感じを表現するに当たり、水の量によって見え方が変わること、実感しながら気付いていった子どもである。その後の題材では、空や木々などにもこの時の表現を活用していた。



上：ステンシルを試すB児と完成した作品

左：本題材で水の加減にこだわるC児とその後の題材の作品（一部）



こうした姿を見ると、体験した表現方法に自分なりの手応えを感じることができれば、その後も意欲的に表現していくことができるように思える。今後も、子どもと表現方法との出会いの場を大切にしていきたい。

指導者：大森 果歩

## 研究の実践

### 1 題材「Future FUZOKU School !」

### 2 授業の実際

#### (1) 個・協働・個の学びの循環を通して、自律した表現者を育む

一人一人が「未来の学校」を思い描くことに夢中になっていた。学校の時間割や昼食を自分で決めることができたり、電子黒板やAIが活用されて進化していたりと様々な発想に富む。その発想の根源となったのが大阪万博のパビリオン映像資料である。現在からは想像もしえない未来の日本社会が児童の思考を感化させ、表したい世界観をより豊かに広げることにつながったと考える。

特にA児は、自ら発想を広げながら表現を発展させていった。自分で考える「未来の学校」をビルのような構造にし、地下から地上8階建ての階層図を描き始めた。そして、新たな画用紙を持ってきて各部屋の見取り図を描き、自分の世界に没入していたかと思うと、「この学校をみんなでつなげてみるとおもしろそう！」と目を輝かせながら意気揚々と提案。個での表現世界から他者との協働へと新たに学びの転換を図るチャンスと感じ、「未来の学校をみんなでどう表す？」と新たな問いを設定した。すると、互いの絵を鑑賞しながら、どう組み合わせようか悩み込む児童たち。自分と他者の絵を俯瞰して見るのが、児童たちに新たな客観的思考を促す仕掛けになったのではないかと感じた。話合いの結果、みんなのアイデアが取り入れられるように「勉強スペース」「遊園地・映画館・水族館」「ゲームコーナー」「バイキング会場・お店」「温泉・部屋」を表すことになり、この中からそれぞれ自分が表したいところを選んだ。A児は、水族館を選んだ友達と何をどのように表すか話し合いながら、水色の熱帯魚を大きく、周りに小さい魚を描いたり、色々な種類の青色を創り出して泡やしぶきを点々模様とスパッタリングで表したりしていた。もっと生き物を増やそうと思ったのか、今度は材料コーナーから折り紙を持ってきてウナギを折り始めた。すると他の児童も、赤やオレンジ、黄色の折り紙でエビやカニなど新たな制作を始めた。自由な学習形態を保障することで、他者との協働が自然と生まれ、新たな表し方に気付くきっかけになったように思う。また、A児は折り紙のウナギを絵にどう表すか悩んでいたが、遊園地のぐにゃぐにゃのジェットコースターに置いてコースを泳げるように、あえて貼り付けず動かせる仕組みにした。遊園地を描いていた児童も、ウナギが泳げるようにコースをのぼして途中で水が出てくる仕掛けを作り、水族館と遊園地のそれぞれの工夫が融合された絵になった。A児は、絵の中に仕掛けをつくる新たな表し方の工夫に気付き、「色々な表し方を使うと楽しくなる」と自分なりに学びを価値付けていた。

このように、それぞれが途中経過の絵を鑑賞しながら表し方について振り返る時間を設けたことで、表し方の変容や自己の学びを自覚することができたと考える。児童同士互いに影響を与え合いながら、自分の学びや表現者としての力に還元していきたいと思った。



#### (2) よりよい表現を追究するための具体的な手立ての必要性

「勉強スペース」を表しているチームに、友達と絵のデザインを真剣に話し合い、工夫して表すことに熱中している児童がいた。このB児を中心に、グループのホワイトボード上の「アイデア」・「表し方」・工夫の視点「形」と「色」を基に、絵や文字で自由に考えを出し合っていた。そのデザイン案を実際に絵に表す時には、場所ごとに机の形や椅子などを四角や三角、星やハート型、円形やL字型に変えながら工夫して表していた。さらに、画用紙を縦や横につなぎ足して中央に円形の読書スペース、そこから教科ごとの勉強スペースや個人部屋につながるレイアウトも工夫し始め、表現世界がどんどん発展していく様子が見受けられた。また、チームの友達

が何色で色を付けるか悩んでいた時も、周りの色からその場所に合う色と一緒に考えながらよりよい表現方法を追究し続けていたが、漠然とした色使いにとどまっている。児童がもっている様々な考えをよりよく表出していくためにも、もっと表現方法を追究することにスポットを当てていきたいと思った。そのために、参考となる作品や映像資料などを鑑賞して真似て描く機会を設けたり、色の組み合わせ方や構図の変化から感じる様々な表し方について学び、新たな表現方法を習得したりすることが必要であると考へた。そして、その身に付けた技法を今後に生かすことができるような学習活動を展開し、絵や物で表現することが苦手な児童も全員がわくわく感もちながら、表現者としてのレベルアップを図っていくことができるようにしたいと思った。

